



新潟県 柏崎市

1. じよんのび街道にある荻ノ島かやぶきの里は、全国でも珍しい茅葺の環状集落を見ることができる。2. 国の重要無形民俗文化財になっている綾子舞とその保存振興の拠点となっている綾子舞会館。3. 柏崎花火は、山花火の片貝、川花火の長岡、海花火の柏崎として、越後三大花火に位置づけられている。「海中空スターメイン」や「600mワイドスターメイン」、「尺玉100発一斉打ち」など海花火の醍醐味を満喫することができる。

地元で眠る地域価値と人の魅力を再発掘 街道でつなぐ「地域」と「未来」

Pick Up

新潟県柏崎市は、昔から北陸の交通の重要な中継地。多くの人や物、様々な文化が交流した歴史の色濃いまちです。今回は、合併を機に七つの新しい街道づくりというユニークなアイデアによる観光振興で、地域の活性化を進めている柏崎市の取り組みをご紹介します。

History
1

柏崎市の概要

ものづくりの盛んなまち

ものづくりの盛んなまち

新潟県のほぼ中央部に位置し、日本海に面した柏崎市。米山・黒姫山・八石山の刈羽三山に囲まれた平野を中心として、約四百四十三平方キロメートルの総面積に約九万三千人が暮らしており、市域の一部が佐渡弥彦米山国定公園に指定されているなど美しい自然に恵まれています。奈良から鎌倉時代までは鉄づくりが盛んに行われ、戦国時代は越後上杉家の軍事力を支えた「越後上布」の原料流通地として、また江戸時代は佐渡で産出した金銀を江戸へ送る交通の要衝として柏崎は栄えました。特に江戸末期は「越後縮」の行商で大いに繁盛し、北陸随一の豊かな町でした。

明治時代には石油掘削により、四十社を超える製油会社設立されて空前の活況を呈しました。その伝統を背景に現在は機械金属工業を中心とした「ものづくりのまち」として発展。切削加工、メッキ、プレス、金型などの基盤技術は世界に誇るもので、現在では約四百の企業が集積して市の基幹産業となっています。観光の中心は夏場の海で、四十二キロメートルに及ぶ海岸線に十五の海水浴場があります。市全域の各所に様々な時代の名残りをとどめる史跡も豊富に点在します。農業では稲作（コシヒカリ米）が盛んです。市内には、世界最大の発電量を有する東京電力株式会社の柏崎刈羽原子力発電所（総出力八百二十一・二万キロワット）が所在しています。

お問い合わせ先：柏崎市役所・観光交流課 TEL 0257-21-2334



柏崎市役所 観光交流課 課長 春日 俊雄さん

合併を機に 新しい観光まちづくりへ

平成十七年、柏崎市は隣接する二町(北の西山町と南の高柳町)との合併を契機に改めて将来に向けてのまちづくりを考えることにしました。基幹産業として機械金属工業は確立していても、広がった市全体にはたぐさんの農業従事者がいます。近年では少子高齢化により中山間地域の農業も縮小しており、また市内各地域間のつながりも時代と共に弱まるなど、課題を抱えていたのです。

「二町が加わったことは、単に市域が広がっただけでなく、観光という面から見れば『海の柏崎』の魅力に、里と山』の魅力が加わったというのです。」

「結びつきたいと思いましたが、高柳町では「じよんのび村」づくりで地域活性化に取り組んでいました。じよんのび」とは、ゆつたりのんびりして心地いいという意味のお国言葉。春日さんはふれあいと集い・食と工業・純産品による里づくりを柱に、交流・観光という仕組みにより年間二十五万人もの観光客を呼んだ実績で、国土交通省から観光カリスマの称号も得ています。」

「みんなが助け合い支え合うという生き方が、雪深い里のじよんのびの精神です。この精神をベースに地元のありのままの魅力を生かし、各地域が連携して活気あるまちづくりができないだろうかと思っています。」

「街道には市指定文化財である飯塚邸、戦国時代に上条上杉家の本拠地だった上条城跡、木喰上人の遺像仏が納められている十王堂など、それぞれ興味深い歴史を持つお宝がたくさんあります。毎回紹介のしがいがありますね。」

綾子舞街道の活動を市がバックアップ。しかし住民から批判の声が...

「綾子舞街道通信」は毎月一回発行され、徐々に「綾子舞街道」の名前も浸透していきました。これに注目したのが市役所の春日さんでした。

「街道で地域を結ぶ方法、そして街道の歴史と文化を地元の共通財産として見直そうとする活動は、まさに私の探



柏崎市役所 観光交流課観光係長 田村 光一さん

「しかし当初、この活動に対して住民から思わぬ批判の声が上がったのです。『観光業者の儲けのために、なぜ自分たちが手伝

わなければならぬのかというのです。観光や交流が地域の活性化につながるという意識が薄く、住民に理解してもらうことができませんでした。」

住民の意識を自覚めさせた「風土市」

そこで春日さんは、地元で採れた農産物などの特産品を即売する「風土市」を企画しました。風土はフード(地元

のおいしい食べ物)にもつながります。いくら観光の重要性を説明しても、言葉ではわかってもらえない。とにかく実行して、何かを感じてもら

うことが第一だと考えたからです。そしてこの年の十月、綾子舞街道観光まちづくり会議の主催により地元の人々(農家、婦人会、子供会など)

に参加してもらい、綾子舞街道沿いの三カ所で第一回の「風土市」を開催しました。このイベントに市の中心スタッフとして参加したのが、柏崎市役所観光交流課観光係長の田村光一さんです。田村さんも春日さんと同じ年に

「この地域資源を生かすべく生まれたのが、新しい観光まちづくりのかたち。越後柏崎



海津印刷 代表 海津 茂貴さん

そば店の宣伝用地図づくりが 発端

週つて平成十五年、JR柏崎駅の西側から南西に延びる国道353号線沿いにあるそば店は、店の宣伝用の地図作りを地元の印刷会社に依頼しました。その印刷会社「海津印刷」の代表・海津茂貴さんはせっかくなので地図を作るなら何か情報を盛り込んだ良いものにしたと考案、アイデアと地図のネーミングに悩んでい

ました。「ある日、妻にその話をした

てこの地域資源を生かすべく生まれたのが、新しい観光まちづくりのかたち。越後柏崎

「七街道」です。しかしそのヒントは、実はある民間の取り組みがありました。」

「そこで思いついたのが地域のコミュニティセンターの利用です。コミュニティセンターとは小学校区単位で分けられた、地域の課題を自ら解決するための自治会。柏崎市には全部で三十二あり、「綾子舞街道」の地域にも七つあります。」

地域情報紙「綾子舞街道通信」を発行

さて「綾子舞街道通信」の発行は決まりましたが、その配布方法が問題になりました。

観光交流課に赴任し、一緒に活動を続けてきました。以前は市の教育委員会に勤務しており、その前は市職員として公民館の仕事にも携わってききました。この経験から、田村さんは市内のコミュニティセンターとのつながりが深かったのです。「綾子舞街道観光まちづくり会議」の運営でもそのネットワークが生かされてきました。「とれたての野菜やもぎたての柿、炊きたての新米コンヒカリ、キノコ、漬物、自家製味噌、お汁粉、手作りグッズなどを販売。無料でどん汁をサービスしたり、そば打ち体験があったりと、各地でなかなか多彩な風土市でした。お客さんは地元の人を中心に、一日で三カ所合計約九百人も訪れ、大変な賑わいでした」と話す田村さん。野菜を出すたびに売切れて、また畑から採ってきて補充するなど商品の売れ行きも上々。安く販売していたので売り上げ金額はさほどではありませんが、自分たちが作ったものが



綾子舞街道での風土市の様子

をお客さんが喜んで買っているのを見て、住民は交流の素晴らしさを身を持って実感できたと言います。「地元への自信と誇り、やりがい、人とふれあう喜びで、みんないきいきしていました。観光と交流の魅力に気付いてもらえたわけです。私たちが十分に手ごたえを感じて、やってみてよかったです。」

History 2 「七街道」誕生のきっかけは住民から生まれた綾子舞街道

越後柏崎七街道



◆鏡石街道◆

かつては魚沼街道とも呼ばれ、鏡石川沿いに南に延びる。柏崎商人の生業だった縮の取引で、江戸中期から生産地の魚沼とを結ぶ要路であった。街道沿いの集落は南北の山裾に続いている。住民は農業のほかには錦鯉の養殖など他地域にはない特色ある暮らしを営んでいた。

◆北条毛利街道◆

古くは小千谷街道と呼ばれた。鎌倉時代より三百三十年、北条毛利氏は越後上杉氏に属し、この地を中心に広く勢力を張った。その支系は西国安芸(広島県)に及び、毛利元就を生んでいる。街道沿いには北条城をはじめ、山城・居館の跡や、往事からの神社仏閣が数多く残る。

◆石油街道◆

「日本書紀」に記される「越国から燃える水献上」とは、西山町妙法寺の献上湯のこととされ、わが国の石油発祥の地といわれている。石油の採掘は江戸初期に妙法寺で行われ、明治中頃から大正期の柏崎・西山は石油景気に沸き返った。現在では石油に代わりガス採掘が続いている。



毎年8月に開催される「草生水(燃える水)まつり」の様子

◆北国街道◆

古くは奈良時代の官道に始まり、江戸時代は徳川幕府が主要五街道に準ずる街道と定めて整備した海沿いに延びる北国の主街道。とくに佐渡の金銀を江戸に送る総路として重要視し、鉢崎に關所を置いて厳しく御法度を知らした。古来、多くの貴人・文人が旅した記録も残る。



關所が置かれていた鉢崎宿場町。現在、關所跡の石碑と高札がある。

◆綾子舞街道◆

中世、この街道沿いの上条郷は越後国主上杉氏の支家である上杉上杉氏の本拠地であり、同家は屈指の名門として長く栄えた。女官に受け継がれる古典芸能「綾子舞」は五百年もの伝統を保ち、都の気品を今に伝える典雅な舞。綾子舞会館前広場で毎年秋公開されている。

◆からむし街道◆

「からむし」とは、植物の「青芋」の茎のこと。その繊維は越後上布の原料となり、中近世に広く珍重された。戦国期の越後上杉氏は、これを特産物として上方に流通させてその利益を軍事に利用していた。山深いこの街道沿いは古い家が多く残り、懐かしい風景が見られる。

◆じよんのび街道◆

鏡石川上流沿いに、魚沼に通じる山間部の主要道。この街道が通る高柳地域は、市内でも独特の文化・風土を持つ。萩ノ島集落や越後門出和紙、貞観園や黒姫神社、西照寺や広済寺といった神社仏閣もある。シンプルながらも高柳の暮らしは、日本人の原風景を素材に感じさせてくれる。

などが現地に赴き、各街道の史跡や名所などの情報を集めることから始まりました。膨大な手間のかかる作業であり、そのうえ七月、柏崎が震度六強の大地震に見舞われて作業が停滞してしまうという障害もありましたが、ここで大きな力となったのが各地域のコミュニティセンターの協力と、それを活用した田村さんのネットワーク力でした。

「協力を依頼すると、コミュニティセンターを通じてたくさんさんの情報が集まり、非常に助かりました。逆に情報を取捨選択する作業にも苦労しましたけどね(笑)あれも載せて」「これも載せて」と多くの要望がありました。どこにもある観光情報ではなく、地元で密着した文化的なものを中心に選定しました。

写真と情報が満載の四十四ページに及ぶガイドブックには、おすすめの散歩コースも掲載され、実際に歩いて訪ねる人への配慮も成されています。またカーナビや携帯電話と運動して、行き先などが検索できるマップコードを添付。便利さのために最新の技術も駆使しています。また田村さんは、このガイドブックは観光客のためだけのものではないと言います。

History 4 今後の課題と展望

住民が地元を知って誇りを持つことが大切

「これは地元の人たちに、地域の魅力を知ってもらうためのツールでもあるのです。他の地域のことはもちろん、地元のことさえあまり知らない人が多いようです。これを読んで、もっと地域のことを知ってほしい。制作した私たちにも、新しい発見がたくさんありました。」

春日さんが市内に残る史跡や文化に着目したのは、地域の歴史を見直すことが、そこに暮らす住民が自分たちの良さや価値を見直すきっかけになればいいと考えたからです。

「地域には他にない素晴らしい宝が埋まっています。これを掘り起こして、まず地元の人たちによく知ってもらうことが大切。自分たちの地域の価値を知らなければ、外からの人のふれあいの中でおのずと魅力が香るものです。そのことで住民は元氣と自信を手に入れ、地域の活性化にもつながります。住民一人ひとりが地域に誇りを持ち、地域の語り部になってほしいと思います。」

電気のふるさと紀行

江戸の昔、「奥の細道」の作者・松尾芭蕉も北国街道を歩きました。旅の途中で柏崎に立ち寄り、立派な旅籠に宿を求めたとのこと。ところがあまりに汚い身なりをしていたため、名を名乗っても偽物だと思われ追い払われてしまいました。後から本物だと気づいた旅籠の者は、「これは大変」とすぐに追いかけてわびましたが、怒った芭蕉は柏崎を遠く離れた鉢崎の小さな宿に泊まったということです。

「奥の細道」では、近くの出雲崎で詠んだ名句「荒海や 佐渡によこたふ 天河」がよく知られ、句碑も残されていますが、柏崎で詠んだ句はありません。もしも旅籠が快く芭蕉を迎えていたら…柏崎のちょっと苦いエピソードです。

History 3 「七街道」事業の推進

「七街道」事業の推進 膨大な作業と障害を乗り越えて

「風土市」で得た手ごたえをパワーにして、春日さんは次のステップへと踏み出しました。「街道」という手法を、全市に適用してみようと考えたのです。もともと柏崎には、東西南北に延びる歴史的な四つの街道がありました。これを利用して新しく名前をつけ、綾子舞街道を加え、さらなるべく全城をカバーしてつなげる意味から新たに二つの街道を加えて七街道とし、「越後柏崎七街道」と命名しました。

「七街道にしたのは語呂もよく、世界的に有名な観光スポットとしてドイツ七街道が知られているからでもあります。昔からの呼称を持つ街道もあるのですが、全体のバランスを考えて北国街道以外は新しくネーミングしました。広い市域からなる柏崎は、主として「七街道」として、地域をつなげることができました。今後はそれぞれの街道を関連付けて観光振興につなげていきます。たとえば「風土市」ですが、平成十九年は綾子舞街道のほかに北条毛利街道と石油街道でも開催されて合計三千人近いお客さんが集まり大盛況となりました。今後は全街道に広げていくなど、さらなる誘客を目指していきたいですね。」

「七街道」事業の中でも、重要な取り組みのひとつがガイドブックの作成でした。「ただ七街道と言っても、その内容や意図はなかなか理解してもらえません。風土市の場合もそうでしたが、まず何かやってみて形にすることが大切。目に見えて、読めるものがあると理解が深まると考えました」と語るのは田村さん。まずは市役所のスタッフ